

# 黄色リングガいの飼育

新里喜信

## 1. 目的

“ジャンボタニシ”の習性（摂餌、産卵行動等）についてはすでに報告（新里、1984）したが、この時の材料は殻や肉が黒色系の貝であった。本年度は、同じリングガイ科に属する黄金色の“ジャンボタニシ”について飼育観察したのでその成長等について報告する。

## 2. 方法

140ℓ角型水槽（43×37×88）2面を用い、循環濾過区と止水区に区分し120ℓの用水で通気を施し飼育した。飼育開始時の稚貝はコイ用配合飼料（cp40）でふ化後30日間飼育したもので、各々38個体用い平均重量は循環濾過2.09g、止水区1.95gであった。また、1ヶ月に2回換水しその際残餌、糞排泄物等を除去した。餌は主にオニノゲシ、タンポポ、ノゲシ等を毎日1回投与した。なお飼育期間は昭和58年6月13日から同年8月18日までであった。

## 3. 結果

成長は図-1に示すとおり循環濾過は35日目で18.5g、45日目で24.5g、61日目で30.5gであった。止水区は27日目で8.1g、40日目で13.1g、61日目で16.5gであった。また、重量分布図-2では循環濾過区で35日間の飼育の結果11~12gで推移し32gが1個体あったのに対し、45日間の飼育ではバラツキが大きく24~31gにモードが推移、32~36gが5個体出現した。61日間の飼育では45日間の飼育よりバラツキがさらに広がり17gから45gの範囲で推移した。一方、止水区は全体的に成長が遅く、27日間の飼育で5~12gの平均した推移があり40日目からバラツキの嶺がみられるようになった。61日目でさらにその差が広がる傾向で推移した。生残率では循環濾過区（35日間飼育）、止水区（27日間飼育）で共に97%であったが、7月28日の測定では循環濾過区（45日間飼育）84%で止水区（40日間飼育）は95%、さらに8月18日の最終測定では循環濾過区（61日間飼育）が74%で止水区（61日間飼育）の84%に比べ低い生残率の結果であった。しかし、循環濾過区、止水区共にその低下率は類似して推移した。また、循環濾過区では8月1日に4卵塊の産卵が確認され、8月9日にふ化したが止水区ではみられなかった。全期間の成長をみると循環濾過区の方が止水区に比べ約2倍量の成長を示した。両区のバラツキをみると平均重量15g前後に個体分布差が大きく生じるものと推察された。

## 4. 考察

リングガイの成長については鹿児島水試指宿分場で餌料の蛋白含有量からみた比較がある。（小山、1983）それによると小型水槽で800/㎡相当の高密度であったためか、全体的に成長はよくなかったが、低蛋白含有飼料であるドッグフード（cp20%）、豚飼料（cp15%）及び野菜区が悪く（1g稚貝を40日間飼育して約2.5g）、高蛋白餌料のコイ配合飼料（cp30~40%）で飼育（40日間飼育で5~6g）した結果が良かった。今回飼育した黄色リングガイの成長をみると同一の餌料で止

水区より循環汚過区の方が最も成長が良いことから水質条件がリングガイの成長を左右すると推察される。また、今回の飼育では25~30gぐらいに達するまでは産卵が認められなかった。このことは、15g前後の黒色リングガイが盛んに産卵するのに比べて特徴的であった。一方、ほぼ同じ時期に別の水槽で循環汚過飼育での成長及び生残率は、平均重量0.26gの稚貝を30日間飼育して5.9g（生残率92%）、79日目で21.3g（生残率23%）、90日目で27.3g（生残率20%）であった。この結果から黄色リングガイは黒色リングガイに比べ成長（45日間飼育で24.5g）歩留りともに良いと思われる。

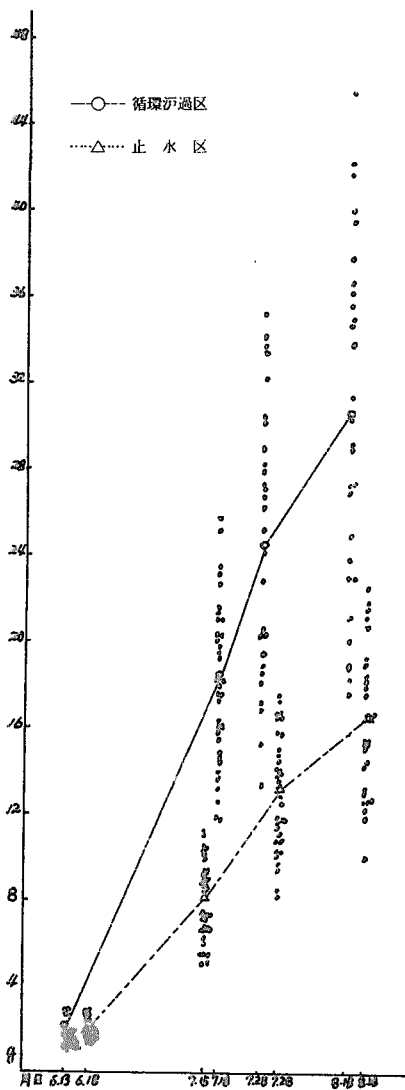


図-1 黄色リングガイの成長

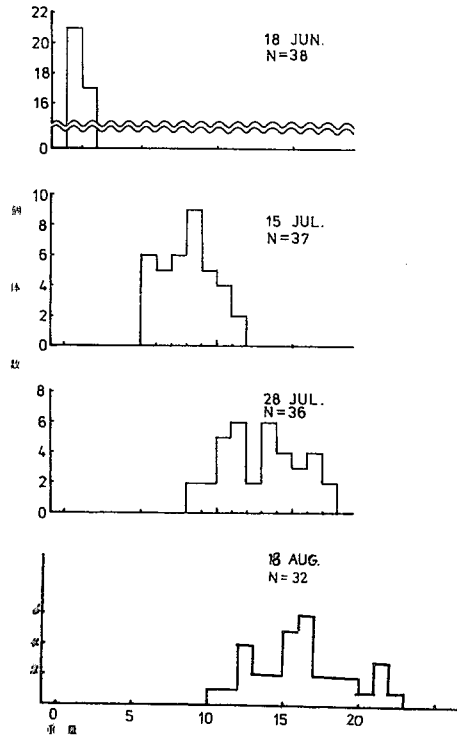


図-2 飼育個体の重量組成（止水区）

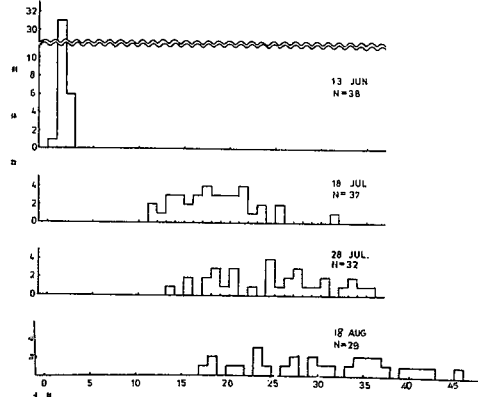


図-3 飼育個体の重量組成（循環汚過区）